

かどつけに出たものであるという。全文を採録はできなかったが、前文の一部は次のようなものである。

そもそも、こがい国大明神をお祝い申し上げます。いい蚕種をとりあわせ、かんびたくして、とりまの日にあけて、ひと掃きふた掃き掃きおとし、（小僧が合の手として）ひと掃きはいは千両の蚕、ふた掃きはいは万両の蚕）、みはき、よはきはきおとし、さてもこの蚕に何にがな進上、桑でも進上と申される。

桑摘み乙女が寄り集り、腰には目籠をつけられて、こいたる桑を目籠に入れて、いんやさんやと運ばれる。こいた桑をば細かにきざみ、あのこやこのこに、さくりさくりとかけられる。（下略、上簇のところまで歌う）この他年始万歳、育児繁昌の七福神、やたら万歳などあったが、正月には、かどつけ万歳は、どこの家でも、年始万歳をやり、所望されて、座敷万歳となり、こがい万歳などをやっていたと語っている。

年始万歳のはじめは、次のような文句で始まる。

そもそも、門に門松、祝いの松、お家にたつのが五葉の松、七五三の縄を、今日やからりと張られて（下略）この他主に正月にきたものでは、おかめ舞、大黒舞、こむそうが尺八をふいたりしてきた。また早乙女踊りの舞いこみなども明治初年まではきたことがあるという。

今もなお村として頼むか、やってくるものに春神楽即ち神楽ぶちがある。午前中くらいは、ひらぶちといって社壇をかついで、大獅子舞、幣舞、おかめ舞くらいを各戸で行なう。午後は寺の前などで、寄せぶち、或はほんかぐらを、村人が集って見る。神楽七芸といって、今寄席で行なっている毬つき、皿廻し、ばちうけなどを巧妙に行なう、半プロのな一行が、新鶴村の新屋敷や、坂下町・喜多方・若松辺にいた。この神楽太鼓がなると、永い冬に埋れた雪国にも、春のおとずれたのを、子供心にも感じとれるのである。この他村々を廻った芸能人には祭文語りがあった。これは後に浪曲師にかわったが、寺堀などにもいた。ちよんがれ、或はさいもんちよんがれ